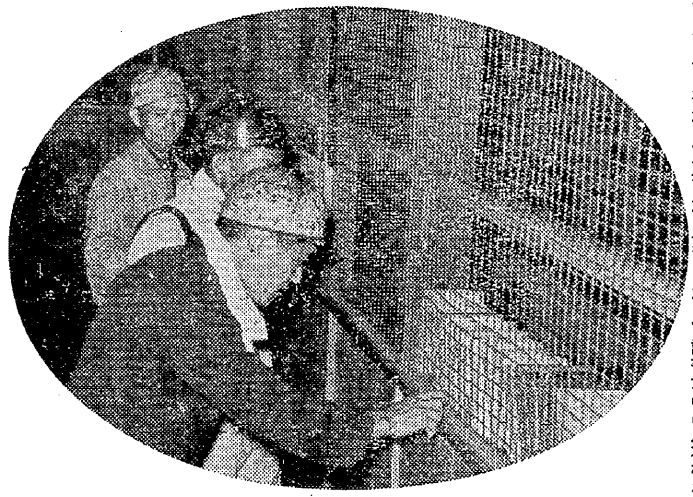
炭鉱マンは剛豪好き

読書の秋に探るヤマの図書館

ひんやりした夜気に包まれながら、庭にすだく虫の音でも聞き読書にふける風流人もとくに増えだした。十月二十七日からは読書週間でもあつた。読みかつ食う秋のシーズン、まず本紙ではさいきんの炭鉱マンの読書実態調査にのり出してみた。

手始めに宮浦、四山、三川のヤマの図書館の利用を調べてみよう。三川は一日平均して五百から六百名、四山四百名、宮浦四百―五百というからまずは各山とも大体平均した読書士のはん布模様である



書休みに押しかけた組合員（宮浦にて）

現在各山の蔵書数は宮浦約五千冊三川は断然多く約二万、四山一万二千冊が盛んに利用されている。まず一番利用度の盛んなのが大衆小説三川では月に五千七百冊、宮浦四千八百余冊というから断然他に抜んでている。ついで外国ものなど純文学がつづき千百（三川）五八九（宮浦）となつている。大衆ものでは断然時代ものが好評で、とくに剣豪ものなどは大もてでこれから推しても炭鉱マンは剣豪が大好きとうなずける。

なかんずく四山では山手樹一郎氏のものがベストワン、つづくは野村胡堂、陣出達朗、吉川英治ものとつづいている。とくに宮浦でもさいきんまで山手ものが圧倒的に多かつたが、近ごろ少しずつ遠ざかり変つて柴田錬三郎ものが頭が持ち上げてきているし、吉川ものもピッチを挙げてきている。このためこの一流の先生たちの本はよつぽど気をつけていないと借出しが出来ないという繁盛ぶりである。

迷　案

炭労代議員は十一月四日、本部・支部・主婦会役員とも元気で帰山した。本部庶務所につめた山下労働部長が開口一番「留守中災害はなかつたかね」といえば、すかさず留守部隊の部員連「労働部長が災害はなかつたかね」といえば、豊富払いに坑口に山元に居らん方が災害はなかつたら「労働部長不在につき災害お断り」としたらという迷案が出た。

神武以来―

十一月六日の中央委員会に北海道の友山である砂川労組の組織部長藤井氏が杵島のオルグとして十数日活躍し、その帰途三池に立寄りメッセージを送つた。

その中で「炭労の統一闘争は神武以来の闘いである」とのべたが、この藤井氏のメッセージに、宮浦支部の某委員から質問が出てこれに答弁をなすという一幕があり、炭労の統一闘争も神武以来だが、メッセージに質問が出て応答があつたのも神武以来だとサヤヤキがあつた。

提灯の嫁入り

神武以来の長期闘争をつづけている八幡製鉄が、来る九日提灯デモを敢行するので三池炭鉱労働組合が使用した提灯を別けて欲しいと大地評を通じて申込があつた。

お互に階級労働者として闘つている八幡製鉄の闘争を激励する意味でも協力しようと執行部で話がまとまり、支部や地域に協力を要請し、約三千個が集つた。さつそく教宣部でこれを荷づくりし、発送段階になつたが八幡の提灯デモのを延期するということでこんどは八留米地協がこれをわけていただきたいとつづいていたが八日、八幡より大型輸送トラックが差しむけられ八幡へ嫁入つていつた。

あゝつらい

十一月七日、全逓は大牟田郵便局に八時半から十時半までの職場大会を指令した。

大地評傘下の組合からピケ要員、説得要員が要請され、三鉱労組からも全執行員が出動した。

職場大会の会場である労働会館に局側から労働課長が来て「局長の命令です職場に帰りなさい」とマイクで叫けべば、待つていた大地評のピケ要員「帰れ帰れ」「ナンショソトか、巡査さんば呼ぶぞ」「帰らんと刑務所に入れるぞ」とみんながヒヤカセば、口をモグモグいわせて退散、あゝ立場の違いはつらいとある課長はいつた。

映画

愛情の儚なさを描く 小説の映画化「下町」

戦後四年目の早春―シベリヤからいつ帰るともしれない夫を待ちながら、りよはお茶の行商して留吉を育てている。お茶はなかなか売れない。寒いある日、下町の鉄材置場の番小屋にいる鶴石とふとしたことから親しくなる。鶴石もシベリヤ帰りである。

りよは露路の奥に結婚相談所の看板をかけている知人きくの二階を借りているのだが、きくはしたたか者で、りよをかし屋の大西に斡旋しようとする。暗いことばかりである。

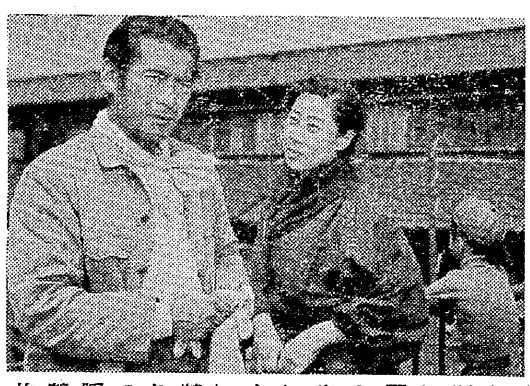
ある日留吉を連れて、りよは商売に出た。午近く、近所の惣菜屋で三人分のおかずを買つて、りよは鶴石の小屋を訪れた。鶴石は鉄材をつみ込んだトラックに留吉をのせて近所のお稲荷さんに連れていつてくれた。キツネのお面を頭にのせ、ブーとふくれたカルメ焼を手に、大燥ぎの留吉と帰つて来た鶴石はお茶を沸かして待兼ねていたりよと、楽しく食事をした。

次の鶴石の休みの日、りよと留吉は鶴石に連れられて待望の浅草観音様へせい一杯のおめかしをしてでかけた。松屋の屋上でさんざん遊んで、六区で映画を見た挙句三人は俄か雨にあつてしまつた。

土砂降りの中を小さな旅館へ飛び込んだ鶴石はすつかり寝込んだ留吉を背中から降ろし、りよのぬれた髪を自分のハンカチで優しくふいてやつた。されるままになつているりよの胸を一瞬、幸福な想いがかすめた。

夜半すぎ、うとうとしているりよの耳もとに声がした。はつと枕から頭をあげたりよに、「おりよさん、そつちにいつてもいい？」とささやくように鶴石がいつた。「いけないわ」と答えるりよに、鶴石は深い溜息をついた。そして戦線に居る間に彼の妻は別の男のところに去つてしまつたのだとポツリポツリ話す鶴石をりよは愛おしく思うが、りよの涌団の上に鶴石がのしかかつてくると、りよは身を固くして「いけないわ……あたしシベリヤのことを考えるのよ」といつてしまつた。

りよとしたように、じーつとしてしまつた。一瞬、りよの心は崩れて鶴石の熱い首を激しく抱いた。（太陽館で）



おもいでの記

五〇〇号記念に寄せて

池田利治

そのころ、現宮川組合長のニックネームは、「参ちやん」だつた「野坂参三氏」に似ていたからである。今のチョビひげはそのまま当時もあつた。参ちやんはずんぐりしていたので、在郷軍人服はずんだれてみつともなかつた。国防色のオールスフだつたからだろうか。でも、一年余りはその服で通した。上京の時もずんだれ軍人服だつたので、外に持ち合せがなかつたのかも知れない。当時は、衣食、住とも苦難を時代だつたからか機関紙「みいけ」のおもいでを語るならば、宮川組合長を切離す訳にはゆかない。そして、語り尽きることのない位にあるのだし、私は、誰が一体機関紙の産みの親で引張りタコだというから、山の科学者の卵がどしどし養成されているわけだ。

思想、哲学、芸術関係も利用者はぼちぼち増えてきており、三川では月に四百名、宮浦三百名が利用しており、このほか専門書も少数ではあるが毎月杜絶えなく出ていることは嬉しい便りである。

ベストセラーに影響されてか、さすがにこの種の読物も利用者は多く挽歌、美徳のよろめき、射程、愛のかたみ、大番、健、回想十年などはいまでも読書数は以前として上位を保つており、ここらあたりが時代ものとともに炭鉱のベストテンという当りらしい。

利用者の激増に伴い、関係者は忙殺されている。例えば宮浦でデータをとつてみたところ火、土曜が一番多く、一番忙しいときは二十五秒に一冊の割合いで借出を行つている。少いときにも四十秒に一冊というから驚き入つた。

とくにスト前日とかスト明けは目まぐるしいほどのことだ。

変つたところでは同じく宮浦だが借出期日を過ぎると延滞料なる罰金が五日毎に十円とられるが、この延滞金が月平均して約八千円ほど集るという。馬鹿にならない金額である。係ではこれもデータをとつているが、延滞する人は大抵きまつた人で常連というところ。事務も繁雑になるし、何とか心してもらえればとボヤいていた。

ともあれヤマの図書館も日を追つて利用者は増えており、質の向上も徐々ではあるがその読書傾向からみられるのは嬉しいことである

であろうか、とふり返りに限定してペンを進めてみたいと思う。

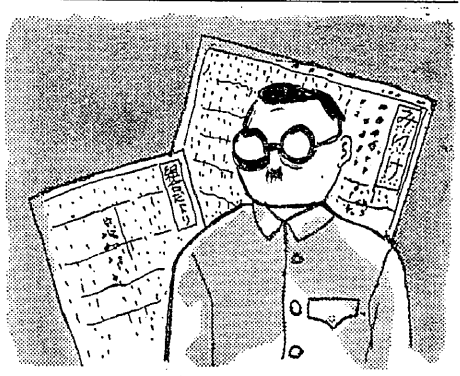
人はよく「よごれ」が「みいけ」の産みの親であると云うが、実は、ずんだれの参ちやんだつたのだ。

参ちやんは、気はやさしくて力がなかつた。組合経済は会社依存が強かつたし、役員同志間がスムースにゆかない、つまり、組合混迷時代だつた。船出したばかりの組合幹部は紙の使い方が多いとか、鉛筆の使い方が荒いとか、ほんの眼先のちつぽけなことを問題にする人もいた位だから、機関紙発行とか、印刷工場経営は姫日時で実現できるものではない。そこで、参ちやんが、また、名案を考え出したのである。

自分達だけの機関紙を作ろう。それが、スタートだつた。ガリ刷B五判八頁の週間紙「組合だより」を発行する案出者は参ちやんなのである。三川出身の中川実さん外数名から、紙が無駄だ。勿体ないと再三の異論がでて、会社からもらつたこともあつた。

機関紙「みいけ」の前進はこうして産まれたのであるから産みの親は「よごれ」の私でなく、ずんだれの「参ちやん」と云う事になる。「みいけ」五百号発刊に際してこのことを明らかにしたかつた気持。解つて戴けるだろうか。

（雄者は初代編集部長）



今週の映画

★セントラル（13―19）翼よあれがパリーの灯だ　国境の決戦
★大天地（13―19）美徳のよろめき　恋して愛して喧嘩して
★銀星（13―19）太陽の帝国　開拓者の血闘
★大牟田名画座（13―19）キング ソロモン　殺し屋稼業
★太陽館（13―19）下町、青い山脈
★グランド（12―19）穴　青空娘
★東映（12―18）富士に立つ影　哀愁のリンゴ園
★新世界（13―19）青い山脈　下町
★金映（13―19）恋して愛して喧嘩して　ひばりが丘の対決
★荒尾名画座（13―19）美徳のよろめき　煙
○富士（13―16）夜のかもめ　サンチヤゴ
○旭映劇（13―16）今日のいのち　妻こそわが命

長屋灯記　中村かめお

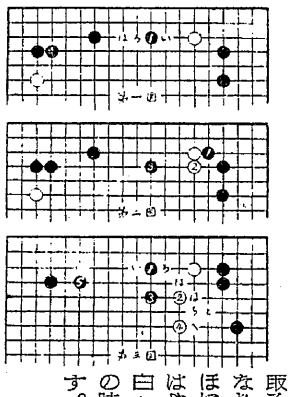
囲碁教室

ハサミ　3　(32)

第一図　左上隅の黒の大ゲイマシマリは堅固を構えですから右上の白石を攻めるのに、黒1或はいときびしくハサムのが適切です。白がはに打込んできても、左上隅の黒には大してひびかないので、このように広く進んでよいのです。ろの三間バサミは、堅い黒からのヒラキとしては狭く、且第三線に石が並ぶので発展性に乏しい嫌いがありこの場合緩い手です。

第二図　黒1とコスミツケて白2と立たせ、3と高く二間にハサムのはしやれた打方です。碁が強くなると、このように白を重くして、つまり捨て難くして3と大きく攻める意味が自然に分つてきますが、初めのうちは前図の打方が無難でしよう。

第三図　黒が右上隅の星下にシマルと、白は1の点にヒライて守つておかなければなりませんが、これを怠つて手を抜けば黒は1と二間にハサムのが適切です。これでいの三間バサミも悪くはないのですが、いでは白ろと打たれると根拠を得られる意味があるし、又ろの一間バサミは、白いと打たれて軽く一子を捨てられ、黒がはと二子を取つたとき、白にと左上隅に力カラれて変化されるおそれがあります。黒1の時白2とケイマすれば、黒3、白4と追撃し、黒5と守れば、敵を攻めつつ地を取る理想的布石になります。白2でほにトンでも、黒はやはり3と打ち白へ、黒と、白ちの時黒5と守ります。



橋口　初義
塩　敬一